

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

限界まで削ぎ落とし素材美を追究

佐川 岳彦 栃木／竹芸家



スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。



1月24日、プレゼンテーションにて

「伝統を守りながら新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。
栃木県選出の匠、竹芸家の佐川岳彦さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。



商談スペースの様子

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催：LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。
本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏(フアッション・ジャーナリスト/アーティスト・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠研究所)らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。
3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。
1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大

「匠」のモノづくりを応援
レクサスが日本全国の
のきつかけとなる大きなチャンスを手にした。
また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター(コラボレーター)が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏(建築家)、廣川玉枝氏(SOMARIA クリエイティブディレクター)、森永邦彦氏(ANREALAGE/代表取締役社長・デザイナー)、辰野しずか氏(クリエイティブディレクター)／プロダクトデザイナー)が登壇し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。



プレゼンテーションの様子



エリア・コンサルティングにて

9月に行われたエリア・コンサルティング。佐川さんは3種類のモビールを試作し、サポートメンバーの川又俊明氏にアドバイスを仰いだ。ヒントとなったのは、「日本にはまだ、インテリアとして生活空間にモビールを吊すという文化は浸透してないような気がする」という川又氏の言葉だった。佐川さんの頭に浮かんだのは、現代の生活空間に自然に溶け込みながら、決して存在を主張せず、生活する人と共に年月を重ねていくオブジェクト。インテリアの一つではなく、生活の中に当たり前にあって、ふとした瞬間に竹という素材を感じるもの

経年変化する竹との暮らしを愉しむ



1本ずつ竹ひごを制作

「鑑賞用の芸術作品でもなく、生活の中で使える器や籠でもないもの。用途はなくても現代生活に溶け込める竹芸作品として、部屋に吊すモビール

制作者だけが知る
竹本来の美を表現
栃木県民にとって竹芸は馴染み深い身近な工芸のひとつだ。大正天皇に籠を献上したことも知られる栃木市の飯塚家をルーツに、竹芸は鑑賞用の精緻な芸術作品を作る技法の一つとして発展してきた。一方で、寒暖差のある気候と那珂川が育む肥沃な土壌により節間の長いしなやかな竹が育つ県北地域では、農具や日用雑器として多くの竹製品が作られ、新たな造形を目指す竹芸の流れが生まれた。
戦後、大田原市に竹工芸の礎を築いた八木沢啓造氏。その八木沢氏に師事した父、佐川素峯と共に竹芸家として作品を作り続ける若き匠、佐川さんにとって、プロジェクトへの参加は大きな挑戦だった。「鑑賞用の芸術作品でもなく、生活の中で使える器や籠でもないもの。用途はなくても現代生活に溶け込める竹芸作品として、部屋に吊すモビール



佐川 岳彦
栃木／竹芸家

1984年栃木県大田原市生まれ。大学卒業後、設計事務所での仕事に従事。父であり竹芸家でもある佐川素峯に師事。現在「竹工房 素竹庵」にて修行を積み、作家としての活動を行う。【直近の活動実績】2018年Singapore Art Week/シンガポール、立夏の候展/東京 shizen



佐川さんの作業風景

「制作者だからこそ知っている制作途中の美しさって、表現できないのかな?」その問いかけに真摯に向き合い、これまで培ってきた竹芸の技法や自らが手掛けてきた作品を見つめ直したとき、一つの答え

を作りたいと考えました。

「それは、「削ぎ落とししていく」というアプローチ法だ。一般的に竹工芸では「加える作業」を重ねて一つのプロダクトを完成させる。竹ひごという素材は、「編み・組み」の技法を用いて造形し、他の素材を加えたり塗りなどの彩色を施して、ようやく作品としての形を成す。

「技法も造形的にも、すべてを限界まで削ぎ落とすことで、私が見えてきた。それは、「削ぎ落とししていく」というアプローチ法だ。一般的に竹工芸では「加える作業」を重ねて一つのプロダクトを完成させる。竹ひごという素材は、「編み・組み」の技法を用いて造形し、他の素材を加えたり塗りなどの彩色を施して、ようやく作品としての形を成す。



完成プロダクト「Room Object《UTSUROI》」

LEXUS
NEW
TAKUMI
PROJECT